The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮津市における言語意識調査の報告
Author(s)	上林, 葵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2016, 14, p. 53-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55612
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 14 号（2016 年 3 月）53-66

宮津市における言語意識調査の報告

上林　葵

【キーワード】宮津市方言、言語意識、方言認知地図、ことばのイメージ

【要旨】

本稿は、2015 年度に京都府宮津市において実施した言語意識調査の報告を行うものである。調査では「自身のことばに対する認識」「関西人としての意識の有無」「近隣地域のことばに対する認識・評価」の 3 点を明らかにすることを試みた。その結果をまとめると以下のようになる。

A）宮津地区・日置地区のインフォーマントともに自身のことばをそれぞれの地区独自のことばであると認識する傾向にある。前者は［宮津弁］という認識を持つことで共通している一方、後者は自身のことばの呼び名に複数のバリエーションを持つ。

B）宮津地区・日置地区に共通して関西人としての意識を持っているインフォーマントが目立った。関西人であることを自身のアイデンティティとして強く感じている者から、宮津の地理的見地を踏まえて客観的に関西人であると判断した者などがおり、いくつかのレベルが認められた。

C）宮津市では養老（ようろう）や栗田（くんだ）が、京丹後全体では舞鶴（まいづる）や加悦（かや）、峰山（みねやま）のことばに違いを感じるインフォーマントが宮津地区・日置地区を通して目立った。宮津市については出身地区によって、回答にやや異なりが見られた。

1.　はじめに

本稿は、2015 年 9 月に実施したフィールドワークの調査項目のうち、言語意識についての結果報告を行うものである。調査では、自身のことばや近隣地域で使用されていることばに対して抱いている意識、及びそれに関連した自身のアイデンティティのあり方に着目し、具体的には以下の 3 点を明らかにすることを試みた。

A）　自身の使用していることばをどのようなものと認識しているか。

B）　自身が「関西人である」という意識はあるか。

C）　近隣地域のことばをどのようなものと認識・評価しているか。

A）は、関西圏に位置しながらも、いわゆる「関西方言」とは区画を異にするとされる宮津市のインフォーマントが、自身のことばに対してどのような認識を持っているのかを探るための項目である。宮津における「自分の方言の位置づけ」（自分のことばは何弁か）について言及した国立国語研究所（1990:149-153）によると、宮津出身者の 8 割以上が「宮津弁を話す」と回答している。しかし、この調査では宮津市のうち日置地区を含む北部の地域は対象外となっており、日置地区の人々の意識については触れられていない。以上から、A）では未調査である日置地区と、宮津地区の現状を明らかにすることを目的とする。

B）はA）の関連から、宮津市という関西圏に位置する地域に住むインフォーマントの、自身のアイデンティティの位置づけを探る意味で設けた項目である。

2014年度に行った他項目の調査の中で、近隣地域のことばに対する指摘や、同じ宮津市内でもインフォーマントの出身地区によってことばの捉え方に違いが見られた。これらのことから、C）は宮津市に住むインフォーマントがどのように周囲の方言を認知しているか、さらにはそれらのことばをどのように評価しているのかを明らかにするために設定した項目である。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で調査概要について述べ、3節でその結果と考察を示し、4節でまとめと今後の課題を述べる。

2.　調査概要

本節では、言語意識調査の概要として、2.1節でインフォーマント情報について、2.2節で調査方法について述べる。

2.1.　インフォーマント情報

言語意識調査におけるインフォーマント情報は以下の通りである。

表 1　インフォーマント情報

ID	地区	性別	年齢	外住歴
MBM	宮津	男性	83	18-22:京都府京都市
MCF	宮津	女性	81	26-28:恵美須町
MEM	宮津	男性	79	なし
MFM	宮津	男性	73	42-45:福井県小浜市、45-51:京都府亀岡市
MGF	宮津	女性	73	なし
MMM	宮津	男性	72	18-19:東京都
MNF	宮津	女性	82	なし
MOF	宮津	女性	78	なし
HCM	日置	男性	83	なし
HEM	日置	男性	73	なし
HFM	日置	男性	70	18-19:京都府綾部市
HGF	日置	女性	84	なし
HHF	日置	女性	80	なし
HIF	日置	女性	79	なし
HJF	日置	女性	73	18-21:京都府京都市

2.2.　調査方法

本調査では、冒頭で述べたように自身のことばや近隣地域のことばをどのように捉え、また、どのように評価しているかといった、インフォーマントのことばに対する意識の側面を明らかにすることを目的としている。これらの目的に従い、表2のような調査項目を設定した。

表 2　調査項目

調査目的	質問番号		質問内容
A)	(1)		あなたの普段話すことばは「何弁」だと思いますか。
C)	(2)	①	宮津市の中で、「ことばが違う」とか「特徴的なことばを話している」とあなたが感じている地域はありますか。
		②	①で話されていることばについて、どのような名前で呼んでいますか。
	(3)	①	(2) のそれぞれのことばについて、具体的にどのようなところを「違う」と感じていますか。
		②	それぞれのことばについて、どのようなイメージを持っていますか。
	(4)	①	京丹後全体の中で、「ことばが違う」とか「特徴的なことばを話している」とあなたが感じている地域はありますか。
		②	①で話されていることばについて、どのような名前で呼んでいますか。
	(5)	①	(4) のそれぞれのことばについて、具体的にどのようなところを「違う」と感じていますか。
		②	それぞれのことばについて、どのようなイメージを持っていますか。
B)	(6)		あなたは「自分は関西人である」という意識がありますか。

調査目的 A）～C）に沿って見てみると、まず A）を明らかにする上で設定したのが（1）の質問である。(1) のようにあえて「『何弁』だと思うか」という固定した質問をすることで、例えば「『〇〇弁』とは言わず、『〇〇のことば』と呼んでいる」といった回答が得られる可能性がある。この場合、そのインフォーマントは自身のことばを「弁」のつくものだとは認識しておらず､異なる呼び名で自身のことばを把握していることが明らかとなる。この質問方法を採ることで、インフォーマントの実際の意識に寄り添った、より精確な回答を得ることができると考えた。

具体的な調査方法として、まず「弁」のつく予想回答を複数用意した。その予想回答に合致する回答が得られた場合はその選択肢に〇をし、類似した回答であっても合致しない場合は【その他の回答】として記入するようにした。

例）［日置弁］と回答した場合：【予想回答】欄の［日置弁］に〇

［日置のことば］と回答した場合：【その他の回答】欄に［日置のことば］と記入

次に B）を明らかにするために設定した質問が表中の（6）である。日本の方言の区画に関してはこれまでに多くの議論がなされてきたが、その中でも東条（1954）は本調査の調査地である宮津市を含む丹後地域について、関西方言（近畿方言）の区画から除外している。位置的には関西圏に含まれるとはいえ、こうした方言区画論的には関西方言とは異なるとされてきた宮津市のインフォーマントは、自身のアイデンティティとして「関西人である」という意識を持っているのだろうか。「関西人」という世間一般に浸透していると思われる表現を直接用いることで、インフォーマントの反応を確かめられると同時に、自身のアイデンティティに関連する回答を引き出すことも可能であると考え、設定した。

具体的には、質問の回答として「ある・どちらかというとある・どちらともいえない・

どちらかというとない・ない」の 5 段階のスケールを設け、その中から該当するスケールを選択してもらった。

そして C）を明らかにするために設けたのが（2）～（5）の質問である。どの地域にことばの違いを感じているか、その地域のことばには名称があるのか、どのような点に違いを感じているか、どのようなイメージを持っているかを順序立てて尋ねることで、近隣地域のことばに対するインフォーマントの認知や評価を把握できると考えた。ことばの認識に関わる質問として（2）（4）を、ことばの評価に関わる質問として（3）（5）を設定した。

ことばの認識に関わる質問の調査には「方言認知地図」のアプローチを援用した。方言認知地図とは、諸方言の使用領域に対する多くの一般人の認識を統合し、「方言使用領域意識」を地図上で表示したものである（ロング 1990）。ロング（前掲）や Long（1999）、朝日（2008）では方言認知地図について次のような作成手順が示されている。

① 地図を示し、「ことばが違っている」と感じるところを線で区切らせる。
② 区切ったそれぞれの地域のことばの呼び名（言語変種名）を記入させる。
③ 得られた呼び名に該当する区切りの線を集計し、それぞれの呼び名が地図上のどの地域のことばとして認知されているかを見る。
④ それぞれの呼び名に該当する区域について、区切った人数のパーセンテージが多い順に濃淡で示す。

このアプローチでは、例えば「東北弁」の認知領域はどこか、あるいは関東のインフォーマントにとっての「標準語」の認知領域はどこかといったように、ことばの「呼び名」を前提とした認知の把握が主体となっている。これはその呼び名が共通認識として人々の中で共有されている場合、つまり多人数を相手とする調査では有利に働く調査方法であるといえる。しかし本調査のように調査人数や調査地が限定されている場合、分析に値する有用な結果が得られないことが危惧される。そこで本調査では、上記手順の①と②のみを採用し、ことばの違いを感じる地区・地域及びそのことばの呼び名を把握するにとどめることとした。本調査では、宮津市のインフォーマントが「同市内や近隣地域であるにもかかわらずことばの違いを密に感じているらしいこと」に注目するため、以上の手順のみからでも十分な結果が得られると考えた。

具体的には 2 つの異なる地域の地図を示し、それらに対してどの地域にことばの違いを感じるかを線引きや指差しなどで回答してもらい、それぞれの地域のことばの呼び名を回答してもらうという方法を採った。

ことばの評価に関わる質問に関しては、それぞれのことばに対してどのような違いを感じているか、及びそのことばにどのようなイメージを持っているかを質問した。イメージについては基本的に自由回答とし、得られた第一回答を記入する方法を採った。回答に詰まっている場合はその様子を第一回答として記入した後、以下に示すイメージ語彙の一覧表を見せ、当てはまるイメージを選んでもらうという手順を踏んだ。使用したイメージ表は言語編集部編（1995）の調査票のイメージ語彙を参考に、追加・修正したものである。言語編集部（前掲）では約 20 の評価語が採用されているが、本調査ではおおよそのイメージを捉えることが目的であったため、インフォーマントの負担を考慮し、比較的イメージ

が湧きやすいと考えられる 10 語に限定した。その際、表の左側と右側で語彙が対義になるように配置した。

表 3　イメージ語彙一覧表

ゆっくり	早口
おだやか	荒っぽい
きれい	汚い
丁寧	きつい
あたたかい	つめたい

3.　調査結果

本節では調査結果について述べる。はじめに 3.1 節では質問（1）の自身のことばに対する認識の結果を示し、続いて 3.2 節で質問（6）の関西人としての意識の有無について、自身のことばとの関連も視野に入れて言及する。3.3 節で質問（2）～（5）の近隣地域におけることばの認識・評価についての結果を述べ、最後に 3.4 節でまとめと考察を行う。

3.1.　自身のことばに対する認識

本調査にご協力いただいたインフォーマントは、自身の使用していることばをどのようなことばと認識しているのか。その結果をまとめると、以下の表 4 のようになった。

表 4　自身のことばに対する認識[1)]

		予想回答					その他の回答
		［宮津弁］	［日置弁］	［京都弁］	［大阪弁］	［関西弁］	
宮津	MBM	●					
	MCF	●					
	MEM	●					
	MFM						認識なし
	MGF						［宮津のことば］
	MMM	●					
	MNF	●					
	MOF	—	—	—	—	—	—
日置	HCM		●				［丹後弁］［ごちゃ混ぜ弁］
	HEM						［標準語に近いことば］
	HFM		●				
	HGF		●				
	HHF						［日置のことば］
	HIF						［日置で通用することば］
	HJF		●				［ごちゃ混ぜのことば］

凡例　●: 選択された回答　—: 未調査　［］: 予想回答以外の回答

1）　MOF は C）の「近隣地域のことばに対する認識」のみの回答となったため、A）及び B）の項目は未調査となっている。

表によると、自身のことばをそれぞれの地区独自のことばであると認識するインフォーマントが両地区に共通して多いことがわかる。ことばの名称に着目すると、予想回答のように地区名を冠した呼び名（[宮津弁］［日置弁]）が両地区ともにみられる。

両地区の回答を比較すると、日置のインフォーマントは宮津と比べて回答にバリエーションがみられた。［日置弁］と回答した HFM や HGF の他に、HHF や HIF のように日置で話されている独自のことばと認識しながらも［日置弁］とは異なる呼び名を用いたインフォーマントもいた。HCM や HJF は［日置弁］としながらも［ごちゃ混ぜ弁］［ごちゃ混ぜのことば］とも回答している。HCM に至っては［標準語に近いことば］であるとの認識がみられた。以上の点から、日置のインフォーマントは自身のことばについて、基本的には日置地区独自のものであると意識しているようである。その一方で、様々な地域のことばが「ごちゃ混ぜ」になっており、［日置弁］のような決まった名称がはっきりと確立されているわけではないようである。

反対に宮津のインフォーマントの場合は［宮津弁］という名称が比較的一般性を持つようであり、「その他の回答」欄にも日置にみられるようなバリエーションのある回答はあまりみられない。宮津のインフォーマントは自身のことばを［宮津弁］とする明確な意識を持っていると思われる。

いずれにしても、［京都弁］［大阪弁］［関西弁］といった他変種の回答が 1 例も見られなかったこと、［宮津弁］［日置弁］ならびにそれに類似する回答（[宮津のことば］［日置のことば]）が多く得られたことから、今回調査を行ったインフォーマントは自身のことばを当該地域独自のものであると捉えている様子が見てとれる。

3.2.　「関西人である」という意識

次に本節では、関西圏に位置しながら関西方言とは区画の異なる方言を持つとされる宮津市在住のインフォーマントに、いわゆる「関西人」としての意識があるかどうかについて言及する。質問（6）の結果は次頁の表 5 の通りである。表は選択されたスケールごとに並べて示し、回答の際に得られたインフォーマントからのコメント及び表 4 に示した「自身のことば」についても併せて記載した。

回答に際し 5 段階のスケールを設けたが、「どちらかというとない」や「ない」と回答したインフォーマントは多くなく、両地区を通して関西人としての意識が「ある」あるいは「どちらかというとある」という選択肢に回答が集中している。いわゆる「関西人」としてのアイデンティティは、方言区画の違いにかかわらず、インフォーマントの意識の中にも形成されているらしいことが明らかとなった。

表 5　「関西人である」という意識はあるか

	ある	どちらかというとある	どちらともいえない	どちらかというとない	ない	備考（コメント）	自身のことば
MEM	●					即答で「関西人である」と回答。	［宮津弁］
MNF	●					自分は「純の関西人」であると思う。	［宮津弁］
MMM	●					京都に住む人間として、このような意識を持たなくてはいけないと思っている。	［宮津弁］
MGF	●						［宮津のことば］
HCM	●						［丹後弁］［ごちゃ混ぜ弁］
HFM	●						［日置弁］
HHF	●						［日置のことば］
HJF	●						［ごちゃ混ぜのことば］
MFM		●				宮津は関西にあるから客観的には「関西人」だろうが、自分は「丹後人」と言う意識の方が強い。	認識なし
HGF		●				宮津は関西にあるから自分も「関西人」だと思う。	［日置弁］
HIF		●				「関西人」＝「大阪の人」というイメージ。自分は「関西人」だとは思うが「京都人」の意識の方がより強い。	［日置で通用することば］
MCF			●				［宮津弁］
HEM					●	大阪や京都の人と同じだとは思わない。	［標準語に近いことば］
MBM					●		［宮津弁］
MOF	—	—	—	—	—	—	—

凡例　●：選択された回答　—：未調査

しかし、インフォーマントからのコメントを見ると、関西人としての意識を持つ人々の中にも、回答に性質の違いがあるように見受けられた。例えば「ある」の回答の中でも、MEM や MNF のように「自分は関西人である」という確固たる意識を持っているインフォーマントもいれば、一方で MMM のようにそうした意識を「持たなくてはいけない」と義務的に捉えている者もいる。

HGF のように「宮津は関西地域に属するため、そこに住む自分は関西人といえる」といった客観的な事実をもとに判断した者や、「関西人」というよりもむしろ「丹後人」「京都人」など、より狭い地域に対してアイデンティティを強く感じている MFM や HIF のようなインフォーマントもいる。完全に「関西人である」とは言い切れないという微妙な意識の様相が、「どちらかというとある」という回答に反映されたのだと考えられる。

関西人としての意識が「ない」HEM は、「関西」を大阪や京都であるとし、これらの地域と宮津市が同じ範疇にあるとは思わないとしている。「関西人である」という意識を持つインフォーマントが多い中にも、こうした全く異なる意識を持つ者がいるということも、関西地域における宮津市の位置づけをうかがわせる結果であるといえるだろう。

表 5 全体を通して見ると関西人としての意識を持つインフォーマントが目立つ結果となったが、各々の関西人としての意識の有無と「自身のことば」を照らし合わせてみると、双方が必ずしも関連しているわけではないことがわかる。「関西人」であることを強く意識している MEM や MNF でさえも、自身のことばを「関西弁」ではなく「宮津弁」であると認識している。関西人としての意識が「ある」とした他のインフォーマントの関しても同様である。唯一関連が見られたのは HEM であった。HEM は「関西人ではない」という

アイデンティティを持っていることが要因となって、自身のことばを「標準語に近いことば」であると認識しているのだと考えられる。

「ある」と「どちらかというとある」の回答の数から、一見すると宮津市のインフォーマントは関西人としての意識を強く持っているように見えるが、その内実には複雑な意識の様相が内在していることが明らかとなった。

3.3.　近隣地域のことばに対する認識

本節では、近隣地域のことばに対してどのような認識を持っているかについて、違いを感じる地域に対する言及やことばの具体的な違い、そのことばのイメージなどをもとに検討した結果を示す。対象とする地域は宮津市内、及び三和・綾部以北（以下「京丹後全体」とする）である。

宮津市に対する認識を調査した理由は、2014 年度に他項目の調査を行う中で、同じ宮津市内であってもインフォーマントの出身地区によってことばの違いの捉え方が異なっているのではないかという印象を受けたためである。また、京丹後全体にも範囲を広げたのは、同じく調査の中で宮津市にとどまらず、隣接地域に対することばの違いを細かく認識しているインフォーマントが少なからず見られたためである。インフォーマントにとって比較的なじみ深いと思われる丹後半島から三和・綾部までを対象地域とし、地図[2] を用いた調査を行った。

以下、その地図をもとに 3.3.1 節では宮津市に対する認識、続いて 3.3.2 節では京丹後全体に対する認識について述べる。

3.3.1.　宮津市に対する認識

宮津市における「ことばの違いを感じる地域」について、宮津と日置のインフォーマントに共通して指摘が目立ったのは養老や栗田といった地区であった。特に養老は、宮津のインフォーマントが 8 名中 7 名、日置のインフォーマントが 7 名中 5 名という高い割合で違いを意識していることが分かった。

はじめに、宮津のインフォーマントの意識について述べる。図 1 は、左図が宮津市における「ことばの違いを感じる地域」を地区別に延べ人数で示したもので、右図がその違いを感じる地域の区画を示したものになっている。左図は濃淡が濃いほど違いを感じる人数が多いことを示しており、右図は線の太さでその区画を回答したインフォーマントの人数を示している。

2）　調査結果を示すにあたり、全体図を主要な地域に分割し、インフォーマントが選択した範囲を地域ごとにカウントして、選択人数別に色分けして示す方法を採った。見やすさを優先させたため、各地域の位置や地域間の境界は正確ではない。

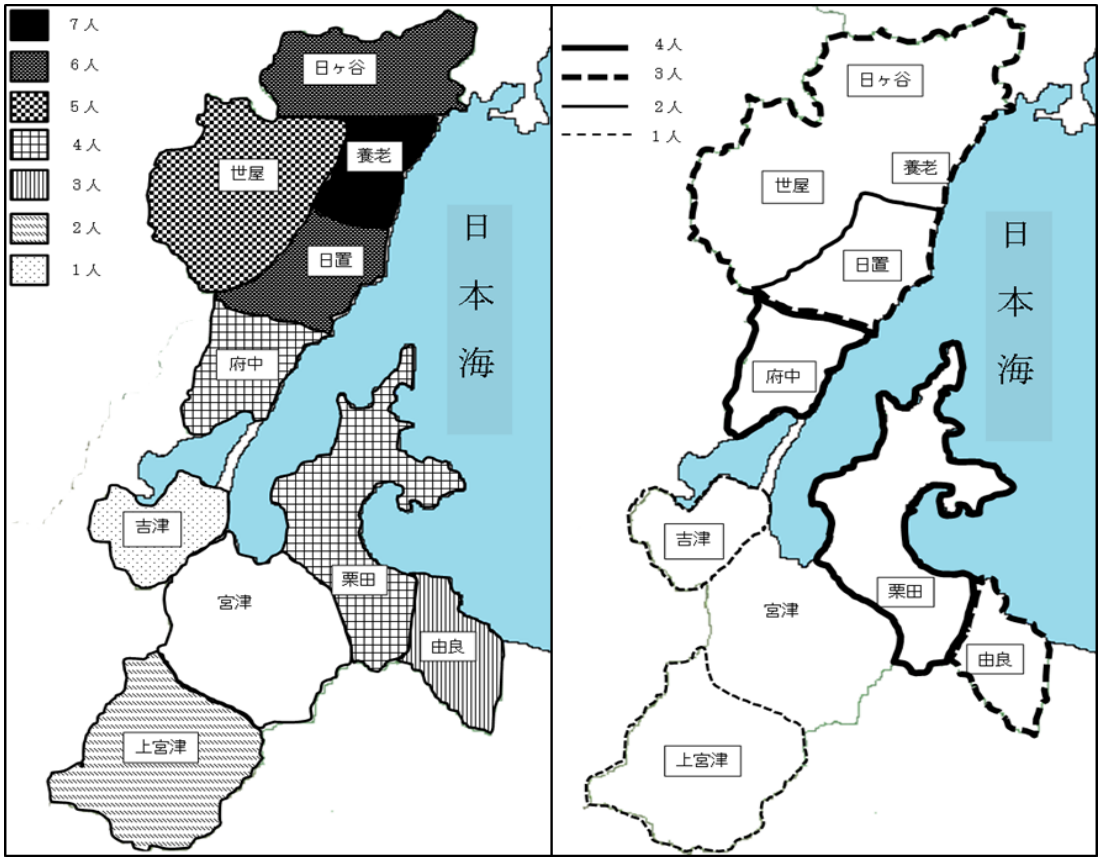

図 1　宮津のインフォーマントの宮津市における「ことばの違いを感じる地域」及びその区画

宮津のインフォーマントは養老を含む天橋立以北の地区(日ヶ谷・養老・世屋・日置・府中)に総じてことばの違いを感じている。特に日ヶ谷・世屋・養老・日置の 4 地区をまとめて［橋北弁］［橋北のことば］などと区別した回答が複数見られ、具体的にはアクセントやことばの言い終わりを伸ばすといった特徴を違いとして認識しているようである。また、イメージとしては「やさしい・おだやか・おっとり・ゆっくり」といった柔和な印象を持つ者が多かった。一方、ことばの違いを感じてはいるが、その呼び名や具体的な違い、イメージなどはわからないとした回答もあり、共通認識として宮津のインフォーマントの間で広く共有されているわけではないこともうかがえる。

天橋立より南の地域については、隣接地区である栗田地区にアクセントの違いや「訛りが強い・田舎っぽい」といったイメージを抱く回答が複数見られた。また、同じ宮津地区内においても、「漁師町」と呼ばれる町のことばについて言及した回答が複数あり、使用語彙に大きな違いを感じていることや「荒っぽい・きつい・声が大きい」といったイメージを持っていることが明らかとなった。その他、吉津や上宮津地区についても違いを指摘した回答がある一方、宮津のインフォーマントの共通認識というまでには至らないようである。

宮津市のことばの区画については、日置以北の 4 地区をまとめて 1 つの区画と認識している傾向がみられた。その他に関しては、地区それぞれを異なる区画と認識しているよう

である。

次に日置のインフォーマントの意識について述べる。図 2 は図 1 同様、左図で宮津市における「ことばの違いを感じる地域」を地区別に延べ人数で示し、右図でその違いを感じる地域の区画を示している。

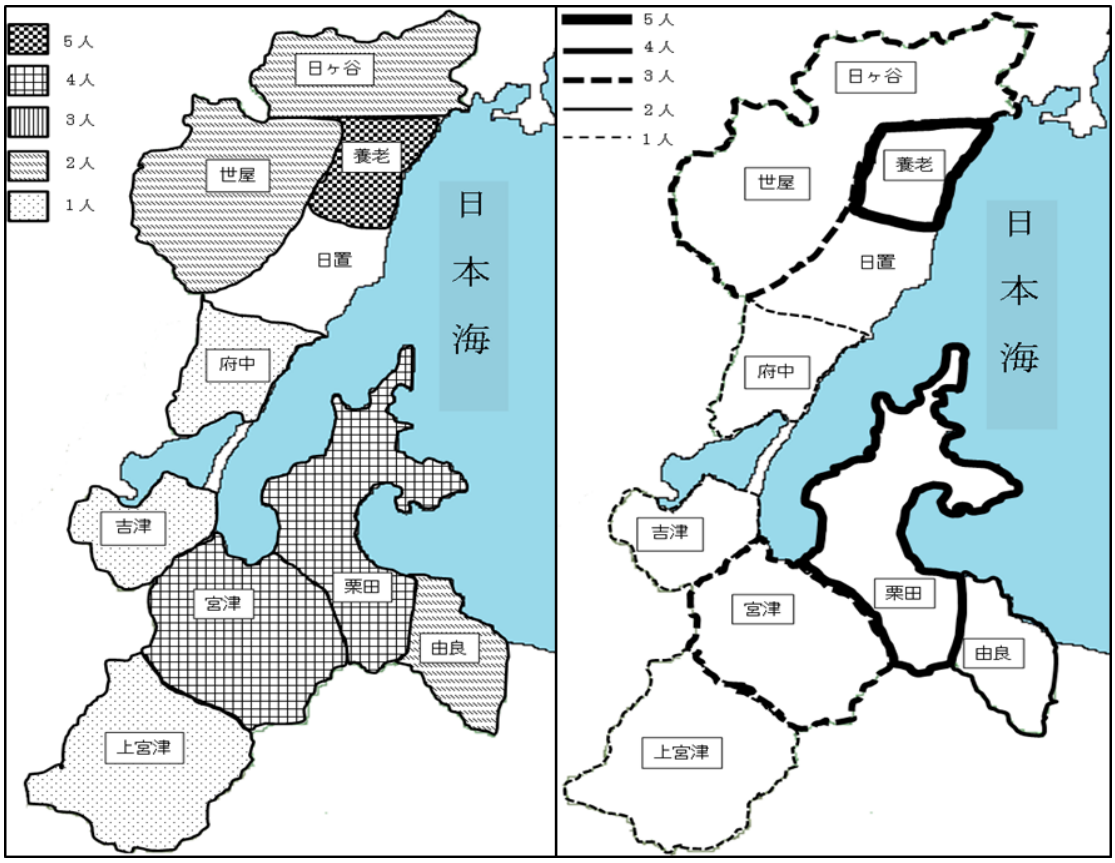

図 2　日置のインフォーマントの宮津市における「ことばの違いを感じる地域」及びその区画

日置のインフォーマントが「ことばの違いを感じる地域」として挙げた中で特に目立ったのは養老・宮津・栗田の 3 地区である。特に養老地区については宮津のインフォーマントのように他の隣接地区とまとめて扱うのではなく、単独でその違いを指摘している。[漁師（の）ことば] という呼び名が共通認識として存在し、アクセントの違いや「きつい・荒っぽい・丁寧ではない・早口」といった特定のイメージが浸透しているようである。養老の隣接地区である日ヶ谷や世屋についても同様のイメージを回答する者もいた。

宮津地区については、具体的な違いははっきりしないものの、「やさしい・ゆっくり・きれい・上品・良いことば」といったイメージがあるようで、市の中心部である宮津地区の威信の高さをうかがわせる回答である。栗田地区は「違う」という意識はあるものの、どのような違いがあるかまではわからないとする回答がほとんどであり、呼び名も特に決まったものはないとする回答が目立った。

ことばの違いを感じる地区の境界については、世屋・日ヶ谷地区を同じ区画と考えてい

るインフォーマントが複数名見受けられた以外は、概ね宮津のインフォーマントと同じく各地区のことばを個別的な違いとして認識している傾向にある。

3.3.2.　京丹後全体に対する認識

京丹後地域全体については、出身地区による差異はさほど見られなかったため、宮津・日置両地区のインフォーマントの回答を一括して示すこととする。下の図 3 は全インフォーマントの回答を反映させたもので、概要は図 1・2 同様である。

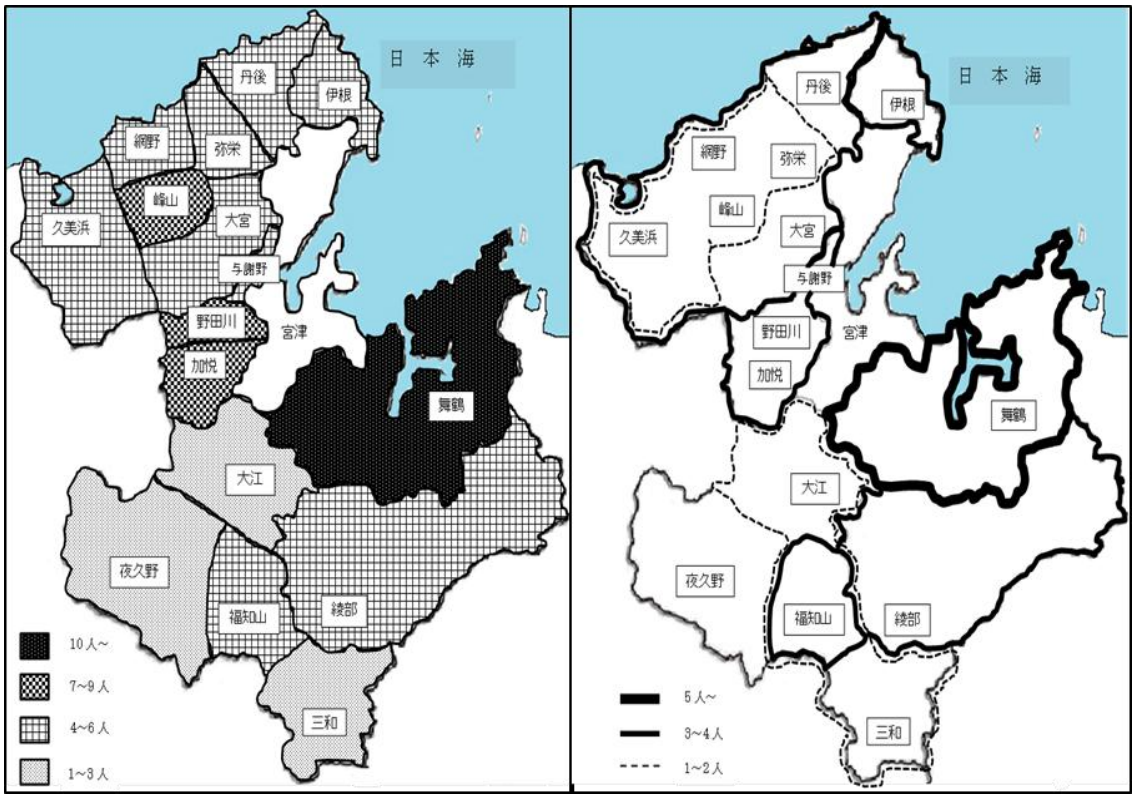

図 3　インフォーマント全員の京丹後全体における「ことばの違いを感じる地域」及びその区画

インフォーマントがことばの違いを特に顕著に感じていると思われる地域として、まず挙げられるのは舞鶴である。15 名中 10 名がその違いを指摘しており、京丹後地域における舞鶴のことばの特異性が共通認識として存在していることをうかがわせる結果であるといえる。指摘したインフォーマントのほぼ全員がそのことばを［チャッタ弁］あるいは［チャッタことば］と呼び、語尾に「～チャッタ」をよく付けることや、それが舞鶴に特有の方言敬語であることなどを指摘した。［チャッタ弁］については、話されている範囲が舞鶴の他、綾部や福知山までを含める者もいたが、おおむね「舞鶴のことば」としての認識が強いようである。イメージとしては「おだやか・やさしい・丁寧・都会的」といった表現が得られたが、特に思いつかない、ぴんとこない、言い表せないなどの回答も多い。

続いて、宮津の西に位置する加悦・野田川のことばについての指摘も目立った。この両地域（＋与謝野）を一括りにして［加悦谷弁］［キャーキャー弁］［キャーことば］などと

呼ぶ回答が多く、特徴としては呼び名にも示されているように語尾に「キャー」や「ジャー」といったことばを付けることが挙げられた。「やさしい・おだやか」といった柔和なイメージを持つ者もいれば、「荒っぽい」あるいは何も思いつかないという者もおり、イメージについてはインフォーマントによって個人差が見られた。

また、宮津の北西に位置する峰山（みねやま）に違いを感じるとする回答も目立ったが、峰山に限らず丹後半島全域（久美浜（くみはま）・網野（あみの）・峰山・弥栄（やさか）・丹後・大宮）のことばに何かしらの違いを感じているインフォーマントが多いようである。呼び名には上記の 6 地域全体あるいはいずれかを指して［丹後弁］とする回答が複数見られ、アクセントの違いや語末の音を「エーエーエー」のように長く伸ばすことなどが特徴として挙げられた。一方、同じ丹後半島に位置してはいるものの、伊根（いね）については当該地域を単独で取りあげ［伊根弁］［伊根のことば］とするなど、他の丹後半島の地域とは異なる見解を示す回答も散見された。イメージは特に何も思いつかない、わからないといった回答や無回答が目立った。

違いを感じる地域の境界に関しては、宮津以北の丹後半島全域や加悦・野田川・与謝野がそれぞれ 1 つの区画として認識されていることがわかったが、宮津市の調査と同様、各地域に個別的な違いを感じているインフォーマントが多いようである。これは地域名の付された地図に影響を受けたことも考えられるため、今後地図を用いた調査を行う場合は、インフォーマントの回答に影響が及ぶ可能性があることを念頭に置く必要がある。

以上、インフォーマントがことばの違いを特に顕著に感じていると思われる近隣地域について述べてきたが、他にも福知山を中心とした南部地域への指摘等も見られた。ことば全てに対して具体的な違いやイメージに関する言及が得られたわけではないが、「違うということはわかる」という意識がいずれの地域のことばに対しても存在しているということが見てとれた。

3.4.　結果のまとめと考察

これまで、宮津市に住むインフォーマントの言語意識及びその関連項目について結果を示してきた。今回の調査で明らかになったことを 1 節冒頭の A）～C）に沿ってまとめると以下のようになる。

A）自身の使用していることばをどのようなものと認識しているか：

- 宮津・日置のインフォーマントともに自身のことばをそれぞれの地区独自のことばであると認識する傾向にある。
- 宮津のインフォーマントの自身のことばの呼び名は［宮津弁］が一般的であり、その他のバリエーションの回答は見られない。
- 日置のインフォーマントの自身のことばの呼び名にはバリエーションがあり、決まった名称が確立されているわけではない。

B）自身が「関西人である」という意識はあるか：

- 宮津・日置に共通して関西人としての意識を持っているインフォーマントが目立った。
- 意識のあり方としては、関西人であることを自身のアイデンティティとして強く

感じている者から、宮津の地理的見地を踏まえて客観的に関西人であると判断した者などがおり、いくつかのレベルが認められた。

- 自身のことばに対する認識との関連はあまり見られなかった。

C） 近隣地域のことばをどのようなものと認識・評価しているか：

- 宮津市では養老や栗田が、京丹後全体では舞鶴や加悦、峰山のことばに違いを感じるインフォーマントが両地区を通して目立った。宮津市については出身地区によって回答にやや異なりが見られた。
- ことばによっては呼び名や具体的特徴、イメージが明確に示されたものもある一方で、全体としては「違いがあるということしかわからない」といった回答も多かった。

宮津・日置両地区のインフォーマントがともに自身のことばを地区独自のものと捉えていることは、奥村（1962）が示した宮津市内部の方言区画の違いを反映した意識であるということができるであろう。近隣地域のことばの違いに対する認識を示した図 1・図 2 からもわかるように、互いの地区に対してことばの違いを感じているインフォーマントが多いことからも、同じ宮津市にあっても異なる言語意識を保持していると考えられる。

「関西人」としての意識を尋ねた結果から言えることとしては、インフォーマントの間でもかなりのばらつきが見られるということが挙げられる。今回のような小規模な調査でもばらつきが見られたということは、宮津市の人々に広くこうした複数のレベルの意識が存在している可能性がある。関西地域に属している宮津市のインフォーマントの全員に、必ずしも「関西人」というアイデンティティが存在しているわけではないことは、宮津市という地域の位置づけを把握する上で興味深い事象であるといえる。

4. まとめと今後の課題

今回調査を行ったインフォーマントは、ことばの面では関西弁や京都弁といった他変種とは異なる、地域独自のものを使用していると意識していることが明らかとなった。一方で、自身のアイデンティティとしてはいわゆる「関西人」であることに肯定的ではあるものの、その自覚にも性質の違いが認められるという複雑さも兼ね備えていることがわかった。また、インフォーマントの数に限りがあるため明言はできないが、近隣地域に対してどのようなことばの違いやイメージを抱いているのかについても一定の傾向を確認することができた。

一方で特にイメージに関しては、ことばそのもののイメージというよりも、その地域に住む知人の性格やその地域に滞在した際に得た自身の経験など、ことばとは直接かかわりのない変数による影響が示されている回答もあった。本稿ではこれらの変数を考慮した分析にまでは踏み込めておらず、同時に回答の個人差に関しても十分に反映させることができていない。今後はこうした点をもとに、個々のインフォーマントの回答を精査することで、より密度の高い分析を行っていくことを課題としたい。また、地図を用いた調査方法に関しても、妥当性の検討が必要である。

【参考文献】

朝日祥之（2008）『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房.

奥村三雄（1962）「京都府方言」井上史雄他編（1996）『日本列島方言叢書　近畿方言考 3　滋賀県・京都府』pp.75-120，ゆまに書房.

言語編集部編（1995）『言語　別冊』24-12，大修館書店.

国立国語研究所（1990）『場面と場面意識』三省堂.

東条操（1954）「国語の方言区画」東条操編『日本方言学』pp.18-33，吉川弘文館.

ロング・ダニエル（1990）「方言認知地図の書き方と読み方」『日本方言研究会　第 50 回研究発表会　発表原稿集』pp.7-16，日本方言研究会.

Long, Daniel (1999) Geographical Perceptions of Japanese Dialect Regions. In Preston, Dennis (ed.) *Handbook of Perceptual Dialectology Vol. 1*,pp.177-198. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

かんばやし　あおい（大阪大学大学院生）

aoinkamba_1991@yahoo.co.jp